2019 年 4 月 22 日

レポートの書き方【現場見学を一例として】

福岡大学工学部社会デザイン工学科水理衛生工学実験室
鈴木慎也

1. はじめに

大学の講義においては、レポート課題の提出が義務づけられることが多い。これまでにも、小学校から高校に至るまで、作文や読書感想文の提出はあったと思われるが、レポートというのは聞き慣れない学生が多いと推察される。

大学卒業のための最終目標は卒業論文を執筆することであり、社会人になっても常に報告等を求められる機会は多々ある。どうしたら感想文ではないレポートを作成できるか、その要点を以下にまとめ、解説する。

2. レポートは感想文ではない

レポートに記載するべき事項は、現地で見たり聞いたりした情報が全てではない。現地見学の**前後**に入手した情報も十分考慮した上で書くべき内容を固めること。事前・事後学習の多さがレポート内容の価値を大きく変える。レポート作成にあたっては、現地見学の「前」に入手した情報、現地で見た情報、聞いた情報、現地見学の「後」に入手した情報をもとに、何らかの「**評価**」を行うこと。評価は必ずしも現状に対して批判的である必要はなく、肯定的な評価を与えてもよい。ただし、読み手に対して、そうした是非の評価基準が明確に分かるようにしておくこと。

物事には「目的」と「手段」がある。施設の設置･運営にも、目的と手段がある。対象とする施設の設置･運営の目的を正確に理解することと、その目的を達成するために講じた手段との組み合わせが適切なのかどうかを検証することが重要である。

3. レポート作成のテクニック

(1) 起承転結を明確にする

頭で思いついたことをそのまま順に文章化している人が非常に多く、読みにくい。最低限、**章立て**をとるなどして、文章全体の骨組みをきちんと作ること。家屋づくりに例えると、土台を作る基礎工事にあたる。起承転結といっても、論文やレポートの構成は、常に「起」「承」「結」の流れで構成されるべきである。「転」に惑わされて、あえて文章の流れを大きく変える必要はない。

何を自分が伝えるべきかを明確にすること。そのために、レポートの序段で**見学の目的**あるいは**レポート作成の目的**を簡単に述べるとよい。

(2) パラグラフに対するこだわりを持つ

土台の上に柱を立てる作業にあたる。そうしなければ、それぞれの部屋をつくることが出来ない。それぞれのパラグラフ(段落)をもとに、その部屋がリビング･寝室･キッチンなどのいずれに相当するのか、役割を明確に与えること。住宅の部屋と違う点は、全てのパラグラフは、1 本の線でつながり、文章の「流れ」をつくりあげていることである。最低限、それぞれのパラグラフで**事実**を述べているのか、**意見**を述べているのかを区別できるようにしておくこと。

(3) 図表の作成・箇条書き等によるアクセントをつける

何でも文章にしてダラダラ書くことが望ましいわけではない。必要に応じて、記述内容を**一覧表**にする、強調したい箇所を図化する(**グラフ**表示など)、**箇条書き**にするなどの工夫をするとよい。それぞれの部屋に対して、デザイン･美観上の装飾を与え、さらに各部屋の役割を際立たせる効果を与える。施設見学レポートであれば、少なくとも以下の情報を図表として記すことが望ましい。なお、挿入する図表は、全て原稿の**右側**に寄せて配置すること。図表のタイトルの記述方法にも間違いが多いので注意すること。

- 施設概要(所在地、対象物、処理能力)
- 処理方法(処理方法の詳細、処理フロー)
- 処理実績と運営状況

4. まとめ

以上、現場見学を一例にレポートの書き方の要点をまとめた。記述内容は、大学生として最低限身につけておくべき文章作成能力であるが、かと言って一朝一夕に身につけられるものではない。地道な練習を繰り返すことによって徐々に習得していくことが望まれる。